

「手づくり公園」がもたらす地域の輪



グラウンドワーク グリーンスタッフ代表 西田 克明

「公園づくり」のきっかけ

私が暮らしている寒河江市島地区の南新町町会は、昭和四十年ごろから隣接する市町村や市内の他地区から移り住んだ人たちが構成されている。

この地区には公民館と公園がなく、歴代の町会長を通じ市に要望を続けてきた。

平成八年十二月、この地区の中心部にある市営住宅が老朽化のため解体となり、約二千平方メートルの更地となった。その後、この跡地の一部を借り受け、公民館を建設することになった。また、市の提案により、残りの用地に「グラウンドワーク」という手法で公園づくりをすることとなった。

ちょっと耳慣れない言葉ではあるが、グラウンドワークとは、英国で始まった「明日に向かっての環境改善運動」のことで、住民、企業、行政の三者がパートナーシップを組み、専門家の指導を得ながら互いに連携、協力して、身近な環境を見直し自らが汗を流して改

善していく活動である。つまり、「グラウンド」という地域の身近な環境を対象に「ワーク」する（汗を流す）、「地域からの実践活動」を意味している。

しかし、私自身が最初からその意味を理解して取り組んだ訳ではない。単に、公園ができるのであれば方法は何でもよかったのだ。そんな不純な動機から私たちの公園づくりが始まった。

コンセプトは「やすらげる公園」

平成十一年三月、地区を代表して公園づくりを検討する「グリーンスタッフ」（以下スタッフ）が結成された。

最初は、公園づくりといっても、スタッフには何の知識もなく抽象論に終始した。トイレ、駐車場、築山、東屋、遊具、せせらぎとみんなの意見がバラバラであった。このままで行くと多数決で、切り張りしたような公園になりそうであった。そこで、市にお願いして、公園づくりの専門家を紹介してもらい、

一緒に地域の人たちと公園を見に行った。

説明を受けながら実際にいろいろな公園を見て回ると、何が必要かが見えてきた。遊具はあまり利用されていなかったし、トイレも管理が大変なことがわかった。公園を取り巻くフェンスは周辺の景観を損なっていた。公園に対するイメージが大きく変わった。

そんな中で、唯一たくさん人が集まり遊んでいる公園があった。そこは、一面に草が生えており、それを短く刈り込んで芝生風にしてあった。その草の広場の中央にはケヤキの木が三本あり、すがすがしい木陰を作っていた。また、木陰の下には、親子連れが戯れていた。ここを見た瞬間これだと思った。コンセプトは、みんなが「やすらげる公園」だ。

そこから、スタッフによる一枚の紙を囲んでのデザインづくりが急ピッチで進められた。

スタッフがまとめた案をもとに、地区の人たちに説明し、意見交換を行いながら、合意形成を図っていった。そして、測量、設計と進み、ようやく一つのデザインを作り上げた。



休日返上で公園づくりにはげむ南新町のみなさん

平成十二年五月から工事が始まった。建設機械が必要な作業については、寒河江市の建設関連企業で構成される「寒河江市建設クラブ」に協力をお願いし、整地とか大きな樹木の移植をしていただいた。

芝生張りや比較的小さな樹木の植栽など自分たちで出来る作業は住民が総出で行った。作業は、近隣町会からの協力も得て、数日間にわたって進められた。その間、延べ二百五十人以上の参加協力があった。

また、これと時期を同じくして、市内の木材会社に提供してもらった角材を使って、「木の広場」づくりも行われた。

こうして初年度の作業目標は達成されたが、その後すぐに、木々や芝生を養成するための手入れ作業が始まっている。また、住民が交代で毎日水まきや草取りも行っている。

今、振り返って

とにかく後ろを振り返る暇がなかった。無我夢中で突っ走って来たが、取り組みから二年が過ぎようとしている昨今、ようやくグラウンドワークの本当の意味がわかってきたような気がする。それは「地域づくり」だと。

当初、私たちは公園をつくることしか頭になかった。また、グラウンドワークとは企業から援助してもらい、地域の住民が労力を提供し、ただ単に安く上げる手法だと勘違いしていた。

しかし、公園づくりという実践活動を通じていろいろなもの知らぬ間に形成されていた。グラウンドワークの取り組みにより、社会を構成する住民、企業、行政の相互の理解が深まったのではなからうか。何とも言えない充実感、達成感、満足感のなかで、地域の輪が出来てきたような気がする。

四つの町会が合同で作業を行ったことで、地域の人たちがより身近になったし、年代を超えて話し合うようにもなった。また、みんな芝を張り、木を植え、水まきをしたりと、自分たちが参加した公園だから愛着があるようだ。そのためか、公園に限らず町内の道路から、ごみや犬のふんが激減した。

また、これまで遠い存在であった行政や企業が身近な存在に感じられるようになった。

市（寒河江市企画調整課「花・緑・せせらぎ推進室」）の職員の方からは、良く面倒を見ていただいた。本当に感謝している。原案づくりに一緒に加わってもらい、助言をいただいた。また、寒河江市建設クラブにお願いに行く際も、橋渡しをしていただいた。同様

に、寒河江市建設クラブの方々にも本当に感謝している。作業に協力していただいた人たちは、作業が終わった今でも、現場に行く途中などにそっと見に来てくださっている。

そのほか、親子で作業に参加して、そこで生まれたものとか、私たちが気づかないところでも、いろいろなものが生まれているはずである。

鉄道に例えると、スタッフは黒子役に徹し地域の人たちが通りやすいようにレールを敷く。それも前を向きながらではなく、後ろを向いて手を差し伸べながら手招きするように。加えて、そのスタッフのために行政がまくら木を敷く。さらには、企業が地域の人たちが乗った客車を後押ししてくれる。そんな関係に見えてくる。

私たちの活動はまだ始まったばかりである。これから、「木洩れ日公園」と名付けられたこの生まれたばかりの赤ちゃん公園と一緒に、この経験という宝物を生かし、さらに挑戦し、地域や社会の輪を育てながら、進化していきたいと思っている。この公園が、五年後・十年後：どのようになっているか、私たちにとっても大変興味がある。

西田 克明

グリーンスタッフ代表
1963年、朝日町生まれ
17年前、寒河江市に 移り住む。
現在、山形市内にある 測量設計
事務所に勤務。